

江戸時代の旅に関する文書を読む

1 史料の要約

文化9年に、藤波お姉様、藤波賀住、会田平左衛門、他供 4名で伊勢参宮に出かけた記録。3月23日に江戸を出立し、東海道の各宿駅を経て伊勢へ向かい、4月13日に桑名に到着し、22日頃まで伊勢の辺りで滞在した後、帰りは中山道を通り、6月6日に浦和の大門まで帰ってきている。本講座で読むのは、伊勢滞在期間の伊勢の両宮を参拝しているところである。宇治内宮御師の山本大夫のところへ宿泊し、二見浦、両宮、朝熊ヶ岳(の山頂にある金剛證寺)、猿田彦神社を参拝するという当時の王道のコースを辿っている。道中では、おうむ石(鸚鵡石)、片葉の杉などの当時の名所と考えられる場所も通っている。

2 江戸時代の旅について

○旅の活発化の要因：幕府交通政策による交通制度や交通施設の整備、村々に各地の情報が入ったこと、旅の案内書や案内図、それに類する書籍などの刊行。

→本講座で扱う道中記も自己の旅を記録した書であり、道中記には、訪れた場所や月日、諸経費を記した日記のようなもの、丁寧な編集により旅行案内書としての性格をもつもの等が存在した。

○旅の目的：寺社へ参拝することを主な目的とし、その道中で各地の名所を辿る旅が多かった。

→広範な地域の人々が訪れた寺社の代表が、伊勢神宮。

皇祖神などとの関わりから、一生に一度は伊勢参宮に参拝すべきともいわれた。

伊勢神宮の参拝には、抜け参り、おかげ参りといった特殊な参宮も存在した。

- ・抜け参り：許可をとらずに参宮に出かけてしまう。女性、若者、奉公人が中心。
- ・おかげ参り：約20年に一度の周期で、膨大な数の人々が一斉に伊勢神宮へ群参する特異な参宮。空から御札が降ってきた、病気が治癒したなどの神威による奇瑞が多く発生したとされている。計15回が確認されており、このうち特に大規模なのは、慶安3年、宝永2年、明和8年、文政13年の4回である。

3 御師と伊勢講

御師は各地へ年1回など定期的な配札を行い、伊勢神宮への参拝を促すとともに、参宮しに来た人々に対しては、自らの屋敷に宿泊させたり、太々神楽を執行したりして盛大にもてなした。本講座で使用する文書の中でも、一行は御師山本大夫のもとへ泊まり、神楽の奉納を行っている。

・伊勢講：村などの共同体の中などで講を組み、時期ごとに金を積み立てて、一定の金額が貯まると、くじなどで順番を決めて代表者が参宮に出かけていた。

1人で旅に出るのには負担が大きい庶民が参宮を実現する手立てだった。